

本科 2 期 12 月度

解答

Z会東大進学教室

高 2 東大国語



## 【添削課題】

出典：「無能子」／名古屋大学 01年

## 書き下し文

無能子秦村の景氏の民舎に寓し、一夕梟其の樹に鳴く。景氏色憂へ、將に之を彈たんとす。無能子之を止む。

景氏曰く、「梟は、凶鳥なり。人家將に凶ならんとすれば、則ち梟來たりて鳴く。之を殺せば則ち凶無きに庶幾からん」と。無能子曰く、「人の家其の鳴くに因りて凶なれば、梟の罪なり。梟人を凶にすべくんば、之を殺すも亦其の已に凶なるを弭むること能はず。將に凶ならんとして鳴くは、梟の忠にして先づ人に示すに非ずや。凶梟に自らざるに、之を殺すは忠を害するなり。矧んや自ら人と謂ふ者、夫の羣羽族と、俱に天地無私の氣より生ずるに、横目方足、虛飛實走異なる所有るは、偶氣の清濁厚薄に隨ひ、自然にして形る、愛憎に宰せらるる者に非るなり。誰か梟をして其の凶を司らしむるや。梟は之れ凶なりと謐するは、誰か自る所なるや。天地之を言ふか。梟自ら之を言ふか。天地言はず、梟自ら言はず、何爲れぞ必ず其れ凶なるや。梟は之れ凶なりと謐するは、自る所を知らず、則ち羽儀五色之を鳳と謂ふ者未だ必ずしも祥ならず、梟未だ必ずしも凶ならず」と。景氏止め、家も亦凶ならず。

## 現代語訳

無能子が秦村の景氏の家に宿り、ある晩梟がその（家の）樹（の上）で鳴いた。（それを聞いた）景氏は顔色を曇らせ、すぐにそれ〔＝梟〕を射落とそうとした。（それを見た）無能子はそれ〔＝射落とすこと〕を止めた。

景氏が言うには、「梟は不吉な鳥です。人の家が禍を呼びそぐになると〔＝人の家に凶事が起るときには〕、梟がやつてきて鳴く（といわれています）。（だから）それ〔＝梟〕を殺せばそれはそのまま禍がないことに近いでしょ（＝禍を防ぐことになるでしょう」と。無能子が（それに答えて）言うには、「人の家がその〔＝梟の〕鳴くことによつて悪くなる〔＝禍が起る〕のなら、（それ

は）梟の罪です。（しかし）梟が人を悪くする「＝人に禍を起こす」ことができるなら、（すでに鳴いてしまったのだから）それを殺しても人がすでに禍に陥つてしまつているのを防ぐことはできません「＝すでに禍が降りかかっているのを救うことはできません」。（また）禍が起こりそうなときに鳴くのは、梟が真心からあらかじめ人に（禍が起こるのを）告げているのではありませんか。禍が梟のせいではないのに、それを殺すのは真心を損なうことになります。まして自ら人間と称する者は「＝人というものは」、あの鳥獸の類と同様に、天地の公平な氣から生じ、（一方は）横になつた目と四角い足（を持った人間）となり、（もう一方は）空を飛び地を走るもの「＝鳥獸」となつて、異なつた状態を持つ「＝異なつたものとなつた」のは、たまたま（生成されたときの）気が澄んでいたか濁つていたか、濃かつたか薄かつたかによって、おのずから形となつた「＝違ひが生じた」のであって、（造物主の）愛憎によつて決められたものではありません「＝造物主の好惡によつて人間か鳥獸かが区別されたのではありません」。（いったい）誰が梟に人の不幸を支配させたのでしょうか。梟は凶鳥であるという名を付けた「＝レッテルを付けた」のは、誰が最初だつたのでしょうか。天地がそのように言つたのでしょうか。梟が自らそう言つたのでしょうか。天地は（そのように）言わず、梟も自ら（そう）言つたわけではありません。どうして（梟が鳴くと）必ず禍が起こるといえるでしょうか。梟が凶鳥であるという汚名を着せるのは、理由がわからず、物の模範となる五色の羽（を持った鳥）、それを鳳と言いますが、（それは）必ずしも縁起がよいわけでもなく「＝縁起が良いといわれる鳳がいたところで必ず良いことが起ころうというわけでもなく」、（凶鳥といわれる）梟も必ずしも悪いとは限りません「＝梟がいても必ず悪いことが起ころうとは限りません」。」と。（そう言われて）景氏は（梟を射るのを）止め、（彼の）家も凶事は起こらなかつた。

## 解答

問1 (ア) あたは（わ）ず (イ) と (ウ) たまたま

問2 (a) 憂えた表情になり（心配顔をして）なども可)  
(b) 悪いことが起ころうとすると（凶事を呼びそうになると）なども可)  
(c) ほとんど同じだろう  
(d) 根拠（理由）が理解できない

〔いづれも解答例〕

問3 梨の忠にして先づ人に示すに非ずや

問4 誰が梨に人の不幸を支配させたのか

問5 梨は凶鳥だということ

問6 人間か鳥かなどという区別は本質的なものではなく、現象面の違いに過ぎないということ。

・（したがつて）梨を凶鳥とするような、対象につけられたレッテルも人間の先入観によるもので、根拠がないということ。

〔解答例〕

#### 特別問題

梨が真心からあらかじめ人に禍が起こるのを告げているのではありませんか

## 書き下し文

古人常に謂ふ、文人行無しと。文人の行無きに非ざるなり。文人は才知高明の士なり。幸にして時に際ひ主に遭ひて、事意と合へば則ち勲業文章、おから千古に足らん。不幸にして流離偃蹇すれば、足を權門に濡らし、身を謀るに急にして、地を擇ぶに遑あらざること、蓋し亦た之有らん。正に桓溫謂ふ所の芳を百世に流す能はざるも、亦た當に臭を萬年に遺すべき者なり。兩言名教の罪人と雖も、然れども亦た庸常の人の見解に非ざるなり。今人但だ楊雲・許敬宗・宋之間・沈約・章子厚・王安石の輩を見て、遂に以て口實と爲す。尚ほ孔北海・諸葛武侯・駱賓王・陶元亮・謝臯羽・文文山・方正學の輩有るを知らざるなり。大率才と不才と各其の半ばに居らん。此の造化の定數、何ぞ但だ文人のみならんや。小節細行に至りては、司馬貲を竊み、幼興齒を折るがごとし。一之を論ずれば則ち宇宙の内、當に全人無かるべし。蓋し才名は時代の忌む所に由りて、未だ一人毛を吹けば衆人聲に吠ゆるを免がれざるのみ。偶此の論を發して千古の文人の爲に氣を吐く。

## 現代語訳

昔の人がいつも言うには、「文人には（徳のある）振舞いがない」と。（しかし本当は）文人に（徳のある）振る舞いがないわけではない。（そもそも）文人は才知と高い見識を備えた学徳のある人物である。（そういう人は）幸いに時流に乗り（自らを理解し活用してくれる）君主に恵まれ、（自らの）務めと（自らの）意志が一致する（環境にある）と、功績も詩文も、自然と永遠に足りるだろう（＝永遠に語り継がれるに足るものとなるだろう）。（だが）不幸にして（居所に恵まれず）さまよい困窮すると、足を權力者の家に濡らし「（＝権力者の許にとどまりへつらつて）」、（自分の）身を考えるのを優先して「（＝保身のことばかり考え）」、（自分のいるべき）場所を選ぶ暇もない（＝どのように身を処すべきかを考える余裕もない）ことは、思うにまた（幸運にも功名を遺すことができた文人がいたのと）同様にあったのだろう。まさに桓温のいわゆる、芳名を（後の）百代に（至るまで）流す「（＝遺す）」ことができなくとも、（芳名を遺し得た者と）同様に悪臭「（＝悪名）」を（後の）万年に遺すことができる者である。（この）二つの言葉「（＝二通りのあり方を

言つた「言葉」は（帝位の簒奪を謀つた桓温のような）聖人の教えたの罪人であるといつても「〔聖人の教えたに反する者の言葉ではあるが〕、しかしながら（聖人の言と）同様に凡庸な人の見解ではない。今のはただ楊雲・許敬宗・宋之間・沈約・章子厚・王安石のようない（品行に問題があつた）連中を見て、結局（彼らの逸話を）語り草としている。（そういう評判の悪い文人もいるがそれ以外にも）やはり孔北海・諸葛武侯・駱賓王・陶元亮・謝臯羽・文文山・方正學のようない（徳にすぐれた）人々もいることを知らないのである。（これら評判の悪い文人も評判の良い文人も）おおむね才徳があるのと才徳がないのと、それぞれその中間にいるのだろう「〔おかげた環境に関わりなく自らを全うできるほどの才徳もなかつたが、しかし名もなく埋もれて生涯を終るぐらゐの凡庸な人物でもなかつたのだろう〕。この天地自然の定まつた運命は、どうしてただ文人のみといえようか、いや、いえまい「〔文人のみが大才に恵まれもせず、かといって凡庸でもないわけではなく、人間はひとしなみにこの天の摂理からは逃れようがない〕。（いうまでもなく）些細な節義や行動に関しては、司馬相如が（卓王孫から）宝〔〔娘の卓文君〕〕を盗み、幼興が（隣家の娘に色目を使つて梭〔〔機織りの道具〕〕を投げつけられ）歯を折つたようなものだ〔〔誰にだつて行いに多少の瑕疵はあるものだ〕〕。一々そのようなことを言い出すと、天地の中に、完璧な人間などいなくなるだろう。思うに、才知と名望は（その）時代の（人々の）嫌うものだから、一人が毛を吹くと〔〔毛を吹いて傷を探すように些細なことまであら探しをして悪く言うと〕〕、皆が（それにつられて欠点を）大声で言い囁すことから免れ得ないだけだ。（私は文人の悪名に関して）ふと思いついてこの論を為し、万世の文人のために（ちょっと）威勢の良いことを言うのである。

### 解答

- 問1 ①〔訓み〕 こうなし（と） [意味] 德のある行いをしない（品行が悪い、なども可）  
②〔訓み〕 みをはかる（に） [意味] 自分の保身を考えること（出世したいと思うこと、なども可）  
③〔訓み〕 いふところ（の） [意味] いわゆる  
④〔訓み〕 おほむね [意味] およそ  
⑤〔訓み〕 きをはく [意味] 威勢良く意見を言う

問2 I 「書き下し文」 蓋し亦た之有らん

〔解釈〕

思うに、後世に功名を遺せた文人がいたのと同様に、悪名を遺した文人もまたいただろう。

II 「書き下し文」

此の造化の定數（此れ造化の定數にして）、何ぞ但だ文人のみならんや

〔解釈〕

この天の摂理は（これは天の摂理であつて）、どうして文人だけにいえることであろうか、いや、すべてのことについていえるのである。

問1

解説

問3 思うに、有能という評判は、時の人々から嫌われることが多いために、中の一人がその人のあらさがしをして欠点を見つけると、

他の人々もこぞつてその欠点を言い立てるという運命から逃れられないというだけのことだ。

① 「行」という字には「ゆく」以外に様々な意味があり、一度漢和辞典で調べてみる価値がある。この場合、設問部分を含む「文人無行」が直前の「古人常謂」の内容であり、続く「非文人之無行也（文人の行無きに非ざるなり）」以下が古人の言葉「文人無行」についての筆者の意見であることをおさえる。つまり古人の「文人無行」に対しても筆者は「非文人之無行也」と言っているわけだから、筆者は「古人」の言に対する反対意見を次の「文人者才知高明之士也」以下で説明していると考えられる。すると、その後の「幸にして……不幸にして……」が、文人が幸運に恵まれた場合と恵まれなかつた場合との説明ととらえることができる。その内容を見ると、幸運に恵まれた場合について「際時遭主（自足千古（時に際ひ主に遭ひて、事意と合へば則ち勲業文章、自から千古に足らん））とあるのに対しても、幸運に恵まれなかつた場合は「濡足權門（足を權門に濡らし、身を謀るに急にして、地を擇ぶに遑あらざる）」状態になると説明されている。つまり幸運に恵まれるかどうかで文人の行いが変わるということである。ここでいう「行」は「行為」「行い」の意味である。したがつて「こうなし」という訓説になる。ただ、意味のほうは「行為がない」「行いがない」では答にならない。文字通り文人が何も行為しなかつた、となってしまう。「無い」のはどのような「行為」か、を考えなければならない。筆者は「非文人之無行也」と言つているように、古人の「文人無行」に反対の立場であることを前提に本文を読んでいけば、「文人は才知高明の士」であり、しかし幸運に恵まれたかどうかによつて行いが変わる、としてい

ることと、さらに本文の後のほうでは「至於小節細行（當無全人（小節細行に至りては、司馬貲を竊み、幼輿歎を折るがごとし。一之を論ずれば則ち宇宙の内、當に全人無かるべし—小さな節義や些細な行いを一々論じていたら、完璧な人間などいなくななる」と、文人の不行跡を擁護している点から、古人の言う文人に「無い」「行為」とは、「立派な行為」「道徳的行為」のことと判断できる。なお、この場合の「行」の辞書的な意味は、「心にある徳を行動として表す」である。

② 「謀」は「考える」「計画する」などの意味だが、設問部分は①解説で触れたように幸運に恵まれず、「流離偃蹇（さまよつて困苦失意の状態になること—本文注参照）」した状態での行為である。それをおさえた上で、設問部分の前後「濡足權門（不選擇地（足を權門に濡らし、身を謀るに急にして、地を擇ぶに遑あらざる）」を見れば、節義や道徳ではなく、「權門（權力者の家）」で生きてゆくこと、つまり權力者に取り入って暮らしてゆく行為であることがわかる。したがって「謀身」の「身」とは自分自身の「身」である。權力者に取り入って「自分自身の身を考える」ことに「急」である、と把握できれば「保身」や「出世」を願うこと、と判断できるだろう。

③ 「所謂」は一般的には「いはゆる」と訓じ、現代日本語でも普通に用いられる熟語。ただし、この場合は「所」と「謂」の間にレ点があるので、「いふところ」と訓読する。

④ 「大率」で「おほむね」と読む。熟字訓である。訓を知つていれば意味は簡単であろう。

⑤ 読みは「きをはく」で、これも現代日本語でも用いられる表現。現代日本語では周囲が沈滞している中で元気の良い状態でいることをいう場合が多く、ここもその意味から考えてゆけばよい。文章全体が批判されやすい文人の擁護であること、設問部分が「千古の文人の爲に」筆者がしたことであるのだから、「（文人擁護のために）威勢良く意見を言う」ぐらいの意味と考えるのは難しくはないだろう。

## 問2 1 「蓋」は述語の前に位置して副詞として機能している場合は「けだし」と読んで推量の辞。「思うに」などという訳があてら

れる。「亦」は「また」と読んで「……もまた同様に」という意味。「有之」の「有」は、推量の意味の「蓋」に対応する述語なので、「あり」ではなく「あらむ（あらん）」と推量の助動詞「む」を加えて訓読する。したがって設問部分の訓読は「蓋し亦た之有らん」。解釈で注意を要するのは「之」の内容と、「亦」があるので何と何が同様に、なのかの二点である。「之」は普通に考えて直前の「濡足權門（不選擇地（足を權門に濡らし、身を謀るに急にして、地を擇ぶに遑あらざる）」であり、問1①解説で見たよ

うに、この部分は文人が幸運に恵まれた場合と恵まれなかつた場合とを対応させて論じているところである。したがつて「亦」で示されている「同様に」は、大雑把にまとめるに「（勲業文章が千古に足りる）幸運な文人がいたのと同様に（権力者に取り入つて生きてゆかなければならぬ）不幸な文人もいた」ということと考えられる。そして、設問部分の直後「正桓温所謂」亦「遺臭萬年者（正に桓温謂ふ所の芳を百世に流す能はざるも、亦當に臭を萬年に遺すべき者なり）」が設問部分を含む「幸にして、蓋し亦た之有らむ」についての言である点から、「蓋し亦た之有らむ」「流芳百世（芳を百世に流す）」のと同様に「遺臭萬年（臭を萬年に遺す）」こともあつたのだろう、つまり後の世まで「芳」を遺す文人がいたのと同様に「臭」を遺してしまつた文人もいたのだろう、という内容ととらえられるだろう。ここまで出来れば、あとは後の世まで残る「芳」や「臭」とは何かだが、これは普通に考えて「良い評判」「悪い評判」ぐらいの意味と判断するのは難しくない。

Ⅱ 語として難しいのは「造化」と「定數」であろう。「造化」は「天地自然の理」あるいは「造物者」、「定數」は「定まつた運命」という意味である。「此造化定數」の部分は「此」を「これ」と読んだ場合は「これは」という意味になつて「これは」であつて」で続く部分につながり、「此れ造化の定數にして」という訓讀になり、「この」と読んだ場合は「この」は」で続く部分につながり、「此の造化の定數」となる。「何但文人哉」の部分は「何哉」と「但」がポイント。「何哉」は「なんぞ（ん）や」と読んで疑問（あるいは反語）の形。「但（唯・惟）」は限定の辞で「ただのみ」と読むが、疑問の辞と組み合わさつた場合は「ただにのみ……んや」と読んで「ただだけが……だらうか、いやそうではない」という反語の意味となる。したがつて「何ぞ但だに文人のみ……んや」となるのだが、本文では述語である「……」にあたる部分がない。この部分の意味を考えれば「どうして文人だけであろうか、いやそうではない」という直訳になることは明らかなので、「である」にあたる断定の助動詞「なり」を補つて「文人のみならんや」とする。解釈で注意すべきは、「造化の定数は、どうして文人だけであろうか、いやそうではない」としてしまうと、「造化の定数」イコール「文人だけではない」ということになつて、人間と天地自然の理によつて定まつた運命が等置されてしまう点である。「此」が指すのは直前の「才與不才各居其半（才と不才と各其の半ばに居らん）」である点から、「文人だけではない」のは「才と不才と」の中間にいる状態であり、そういう状態を「造化の定數（天地自然の理によつて定まつた運命）」によるものだ、と言つてることがわかる。したがつて「何但文人哉」の部分で省略されている述語を補うと、「どうして文人だけ（がそういう運命であると）いえるだらうか、いやいえない」ということになる。

**問3** 難しい問題だが、注を参考に考えてゆく。注にある「毛を吹いて疵を求む」が最大のポイント。「毛に覆われて見えない部分も傷がないかどうか調べる」で、「うるさく欠点を探す」「アラ探しをする」などという意味。つまり「一人吹毛而衆人吠聲（一人毛を吹けば衆人聲に吠ゆ）」とは、「一人がアラ探しをして欠点を見つけると、衆人がその声に反応して一斉に騒ぎ出す」ということである。「由才名時代所忌（才名は時代の忌む所に由りて）」の部分は「由」がある点から直後の「一人吹毛而衆人吠聲」の理由、「蓋」は問2-Iの解説でも触れたように、副詞の位置にあるので「けだし—思うに」という推量の辞、「耳」は「已」「已矣」「而已矣」などと同様、文末で限定を示す辞。以上をふまえて答をまとめればよい。

●  
×  
毛  
●

## 【問題】(演習)

出典：佐藤信夫『レトリック認識』／京都大学 96年・改題

## 文章略解

伝統的なレトリック理論の語る内容に反して、実際の言語表現の上で「ためらう」と「ためらうふりをすること」とを明確に区別することは難しい。しかし、小林秀雄の文章がその良い例であるように、言語表現上の擬態としての「ためらい」は、真剣な態度で対象を考察すると同時に自己の意見を相対化してみせる技法であり、それは読者への配慮とともに、自らの内面の真実を吐露する手段である言葉が本来的に他者と共有されるものであることによる齟齬を解消しようとする誠実さの発露でもある。

## 解答

問1 本当のためらいとレトリックとしてのその擬態とは、実際には区別のつけられない例も多いのに、それらが一定の基準で常に区別できるという前提でとらえようとする傾向。〔78字〕

問2 対象を「仰々しく」「粗雑な論理」と断じておきながら、同時に「颯爽」「簡潔」という正反対の捉え方が併記されることで、自らの意見を相対化する筆者の余裕と遊び心が感じ取れるから。〔86字〕

問3 ためらいの擬態は、明快さのみを追求するあまりの粗雑な断定に陥るのを避け、真剣であると同時に余裕と遊びの精神を示す、読者への配慮の現れだから。〔70字〕

問4

本来的に他者と共有される言語で、自己の内面の思いを語ろうとしても、自らの意図を十分に反映しきれず、場合によつては結果として虚偽を語ってしまう可能性もあるということ。〔82字〕

## 【問題】(自習)

出典：栗津則雄「解体と表現～現代文学論～」／東京大学 75年

### 文章略解

日常の言語では、文章は、一種の記号として、読む者を事実の総体としての現実に運ぶ。この点に、小説の言語との間の一つの根本的な相違がある。言語の背後の事実への無知。小説では、これが一つの本質的要素として存続し続ける。小説の言語は、我々がその対象に対して己の生の力で対処し反応することを拒む。読む力によって初めて初めて接しうるような世界に、人物や事物を、その不透明な堅固さとも言うべき性質を通して現存させる。

### 解答

問1 1

問2 3

問3 2

問4 5

### 解説

問1 「このような」という指示語の受ける内容は、比較的わかりやすい。「このような類似性のために、人びとは、日常の言語と小説の言語とを、しばしば同一視することになる……」とあることから、この「類似性」は「日常の言語と小説の言語と」に関わることがわかる。それを踏まえて、傍線部ア直前の「ところで」で受けられる箇所を見てみると、「同じ文章を、『城』のなかで読んだ

場合はどうかというと、その場合も、われわれが、文章そのものではなく、文章がさし示すものへ向かうという点では、何の相違もないようだ。」と書いてある。「文章がさし示すものへ向かう」というこの箇所からだけでも、1が導かれるだろう。

更に26行目からの「われわれが知りつくしているこの『局長』ということばが、小説のなかに置かれたとき、この場合もやはり、このことばは、日常言語と同様、局長という対象をさし示してはいるが、われわれは、この『局長』を、姿かたちやなすべき報告についての想起や用件に関する疑問のなかに解消することは出来ないのである。」の部分から、2・4の選択肢は「日常言語」にのみ言えることであつて誤りとなる。3の「対応関係」は、これだけでは何と何との対応関係か、よくわからない。たとえ「文章と、それが指示する対象との対応関係」であるとしても、「小説の言語」は対象を指示するだけで、そこに対応物をもたないのである。

**問2** 傍線部イを含む一文直後の一文「なぜなら、小説においては、局長は、この『局長』ということばが発せられたのちに、はじめて存在するものであるからだ。」から、3であることが明らか。1・2・4の選択肢のような内容のことは、本文で話題となつていい。ない。

**問3** 問2の解説で挙げた「小説においては、局長は、この『局長』ということばが発せられたのちに、はじめて存在するものである」と対比させる形で、その直後に「現実の世界においては、……」とくる。「われわれは、『局長』ということばにたいして、あらかじめ存在している局長の姿かたちや、彼になすべき報告を思い起せばよい。あるいはまた、『何の用事だろう』という疑問を抱けばよい。かくして、これらの想起や疑問のなかに、局長という存在を解消すればよい。」この部分が、最初の根拠となる。なぜならば、空欄ウは、「小説の言語」についての説明箇所で出てくるが、「のではなく」と否定されている以上、空欄ウには、対立項であるこの「現実の世界において」の内容が入ることになるからである。

この後、「ところが」という逆接の接続詞によって「われわれが知りつくしているこの『局長』ということばが、小説のなかに置かれたとき、……」の方に話題が転換する。したがつて、ここで否定されている記述箇所に着目する。すなわち、「われわれは、この『局長』を、姿かたちやなすべき報告についての想起や用件に関する疑問のなかに解消することは出来ないのである。」や「すなわち、このことばは、(たしかに局長をさし示しはするものの)そのことによつて現実の局長のなかに消え去ることはない。」などである。これが「ウ」のではなく、と対応する。これが、第二の根拠箇所である。

最後に「ウ」のではなく、「局長」という、言語にして本質なるものが現存するのである。」という、否定肯定の関係に注目してほしい。「言語にして本質なるものが現存する」と反対の内容を考えるのである。

#### 問4 消去法でいく。

1. 「前者（『小説の言語』）が記号としての機能を喪失し」が、問1でも見た、小説の言語と日常の言語との類似性に関する記述に反する。
2. 「言語を超えた対象に読者を運ぶ象徴性」の箇所が誤り。本文に書かれていらない。
3. 「現実の存在によつてつねに相対化される」とか「観念の肉化」だと、ましてそれが「はなはだ不完全にしか成就できな  
い。」だと、そんなことは話題になつていない。
4. 「口語としての共通点」など話題になつていないし、「文章語としての」も余計。
5. 26行目「われわれが知りつくしているこの『局長』ということばが、小説のなかに置かれたとき、……」以降の「……ではい  
るが、……ことは出来ないのである。すなわち、……するものの、……ことはない。」という否定肯定の表現箇所に合致する。

●  
×  
毛  
●

## 【問題】（演習）

出典：竹沢尚一郎『宗教という技法』／大阪大学 04年

## 文章略解

物語は、現実の世界でも生じるような出来事の連続を時間の流れの中で語ったものに過ぎないが、それら一連の出来事を必然的な連関として表現し、個々の出来事の持つ意味を語るものである。また、特定の場所や時間の中で特定の人物に生起した個別的な事象を語りながら、人間の人生や運命についての認識を普遍的な次元で示すものもある。この、あくまでも個別性の次元で語りながらそれを普遍性へと超克させる点が物語の特徴であり、出来事の個別性を一般法則の中に解消してしまう科学との違いである。

## 解答

問1 (1)＝儀礼 (2)＝緊密 (3)＝連 (4)＝脈絡

問2 (ア)＝特定の時間と場所で、特定の人物の身の上に起こった一連の具体的な出来事や、それについて人物が抱いた感情や印象を語ること。〔59字〕  
(イ)＝特定の登場人物がその人生の中で経験した個別の具体的な出来事とそれら出来事相互の関係を語りながら、人間存在についての普遍的な認識を示すということ。〔72字〕

問3 物語は、それ自体としては独立した個々の出来事を相互に関係づけ、必然的な連関として示してそれぞれの出来事の持つ固有の意味を語り、それによって人間やその人生についての普遍的な認識を人に与えるものだから。〔99字〕

## 【問題】(自習)

出典・石原吉郎『望郷と海』／千葉大学 82年

### 文章略解

町々では、その展開に参加できないままの奇妙な場面にいくらでも遭遇できる。前後の場面を完全に省略した形で投げ出されているからこそ、感動をもつてその前に立ち止まることにもなる。人生の切り口とも言えるその場面が、無数の物語の可能性―危機とも言うべき不安を内蔵しているという認識が、ある戦慄のようなものを含んでいるからだ。こうした可能性が成立し得るのは、その場面が既に自分の側の出来事となっているためである。

### 解答

問1 (オ)

問2 一個の自我が多数の可能性に分散解体する事態を迫られるから。〔29字・解答例〕

問3 たまたま遭遇するどの場面も、すべて無数の物語に展開する可能性を持つ。それに気づくことは、その場面がこちら側の出来事になっていて、一つの感動を生むと同時に、無数の自我に分裂し解体する危機に迫られるから。〔100字・解答例〕

問4 私たちがその〈物語〉の展開に関わりえない (11~12行目)

問5 遭遇した一つの場面が、無数の物語に展開しうる可能性をもつことに気づいたとき。〔38字・解答例〕

問1 第二段落の構成は次のようなものだ。

通常私たちは、

Xこういう場面を奇妙とは考えないという一種の慣習に従つて



Yその前を素通りすることにしている。



〔理由〕それは、……ためであり、……によるのかもしれない。しかし、何よりも大きな理由は、……

〔しかし〕

〔理由〕まさにそのような事情こそ逆に……理由ともなるのである。



私たちが

xある感動をもつて



yその前に立ちどまる

「X → Y」と「x → y」とを対応させて考える。

問2 第二段落冒頭で「通常私たちは、こういう場面を奇妙とは考えないという一種の慣習に従つて、その前を素通りすることにしている。」と述べられているのは、「危機」回避のためである。したがって、その理由の部分に、この「危機」について述べられているものと考える。ただし、「何よりも大きな理由」の方は、問1の解説で見たとおり、「まさにそのような事情こそ逆に、私たちが

ある感動をもつてその前に立ちどまる理由ともなるのである」から、「しかし」で受けられている、それ以外の理由、すなわち「それは、私たちの注意力と想像力には限りがあるためであり、まがりなりにも一個の自我として生きのびるためには、無益な分散と解体から積極的に自己を防衛しなければならないという顧慮によるのかもしれない。」から考える。「個の自我」の「無益な分散と解体」の『危機』なのである。

### 問3

第三段落末尾の一文「まさにそのような事情こそ逆に、私たちがある感動をもつてその前に立ちどまる理由ともなるのである。」の理由すなわち論理的中間項を説明しているのが、次の第四段落である。

①それらの場面が、それに連続する前後の場面を完全に省略したかたちで、いわば私たちがその〈物語〉の展開にかかわりえなかたちのまで投げ出されている……まさにそのような事情こそ逆に、……理由ともなるのである。

←

④私たちがある感動をもつて→⑤その前に立ちどまる

①ある切り口、ある場面を示して、

←

③その物語の全体をいえといわれたら、実に無数の物語がそこから生まれるだろう。  
(類比・一点を通る直線が……無数に存在するように、)

①このいわば人生の切り口が

←

③同時に無数の場面に展開しうる可能性……を内蔵しているという認識は、

←

④ある戦慄のようなものを含んでいる。

この因果関係は、さらに第六段落前半で、次のように述べられている。

①私たちが一つの場面に遭遇し、

②その場面がもはや私たちの側の出来事になつていていたため



③同時にそれが無数の物語をもちうることのため

そのような可能性が成立しうる



④一つの感動とともに立ちどまる

ちなみに、「戦慄」という語は、ゾクツとくることであり、ここには「感動」と「危機—不安」の両方がこめられる。「感動」の方は、ここに見た「①→②→③」を押さえる。「危機—不安」に関しては、問2の解説を参照してほしい。

問4

「私たちと世界のあいだ」というのは、「その場面がもはや私たちの側の出来事になつていていたためであつて」を受けていることからも、「私たち」と「その場面」との関係である。「裂け目」というのだから、その関係が断たれているということだ。また、「それ（一つの場面）がかなならず一つの物語をもつということ以上に、同時にそれが無数の物語をもちうこと」とある点から、「事実としての一つの物語VS可能性としての無数の物語」という対立関係に照らし合わせて考えてみる。「私たち」と「場面—事実としての一つの物語」との関係の断絶、といった内容のことがどこに書かれていたか、これらの語句に似た語句の組み合わせを手掛かりに探す。

問5

設問文で「どういうことに気づいたときか」と尋ねられている。「気づく」とこと第四段落末尾近くの「認識」とが対応するため、「このいわば人生の切り口が同時に無数の場面に展開しうる可能性……」が第一の根拠となる。

次に、以下の第六段落後半の構成に着目する。

a 同時にそれが無数の物語をもちうる……そのような可能性が成立しうる

←

β その場面がもはや私たちの側の出来事になつていてる

a そのとき、

←

β 私たちと世界のあいだに置かれた灰色の裂け目はひそかに埋め去られる。

=====

β 私たちと世界のあいだに生き生きとした結びつきが回復するのは

→

a このときである。

「どういうことに気づいたときか」の「とき」は、「このとき」の「とき」である。a 部分の重なりを辿っていく。

L2J

高2東大國語



Z-KAI

会員番号

氏名

不許複製